大正十三年十一月廿五日印刷納本・大正十三年十二月十五日發行

光

第三十六輯

大正十三年十二月

◆一燈園の家風……西田天香

◆礎をおく人……住田蓮車

同人懺悔報恩の奉仕者
祈願不二の光明によれる生活
費用供養されたる浄財

◆十輪堂の松風を聽きて……安藤洲一

◆歐米資本主義發達史要……久保田明光

一燈園・宣光社

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委れ佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生產業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天園、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは箇中の消息、もとよく言辭の勞し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規を守ることによりて許さる。天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

西田天香

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

一燈園の家風（二）

西田天香

物には内面より見るのと、外面より見るのと、二つの形があります。内より見た家風は自然のまゝ、ありのまゝとでも申しませうか、言葉では何とも言ひ現しやうがありませんが、此のありのまゝといふものを外から見ると托鉢の相（すがた）です。ありのまゝのうちに含まれる深さは、外側へは一寸解りかねるかと思ひます。

今度の生活での自然といふのは、夜になると寝る、朝になると起きる、起きたら働らく、殘つたものは大事に預るといふやうなことです。前の生活ならその中にいろ〳〵の慾が入るのです。人間慾といふものです。今修行してゐるありのまゝの生活は、さうした慾らしいものはないのです。外からは氣の毒さうに、憫れさうに、苦行でゞもあるかのやうに見える、併し、托鉢者自身の心の悦びは、さうした眼で眺めてゐる外側の人には到底解らぬところのものです。形は奈何にも貧しく單純な生活ですが、普通の生活とは世界が違ふのです。

托鉢はありのまゝの延長であります。すべて光のまゝであります。本來が佛の國であり、天國で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

あるのです。妄念妄想の故に地獄を作るのです。苦しい無理をせず、朝は起きる、夜は眠る、時刻が來れば食事をする、食後は働らく、これが根本的家風であります。子供のやうなありのまゝです子供は絕えず働らき通す、子供は執着によつて働くのでないから、いくらでも働らけるのです。私達とても、執着や囚はれを去つて了へば、まだまだ幾らでも働ける筈です。此の生活に入ると、弱さうな人と心配してゐても、不思議によく働らくやうになり、働らくから自然丈夫にもなります。妄想によつて頭をつかはぬやうになると、からだが自づと輕く動けるやうになります。心配がなくなつて、よく働らくやうになる、此の方が自然です。

乳のみ兒はお乳がほしくなると泣きます、泣くと母親は乳房を與へます。すべて生物は生れた以上、働らいて居れば、きつと、自然に食べ物はあるのです。それは自分が取つて食ふのではなく、お光（ひかり）から養はれるのです。着物を與へられる。住み家を與へられる。いろ〳〵な財物を持つて來られる、自然にそれらの物が自分のところに持ち來たされたら、自分の物としてゞはなく、お光のものとして預からせていたゞくのです。

前の生活も、やはり、寢る、起きる、食ふ、さうして働らく生活ですが、生産の剩りは自分のものとして所有する立て方の生活です。此の「自分のもの」といふ觀念が一つ入つた時、もはやそれは純粹のありのまゝではなくなつたのです。一燈園生活に於ては、先づ根本は一切がお光のもので

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

あるといふところから始まる、所有主はお光です、私は托されて預からせていたゞくのです。さうして、自他一体、みんなが兄弟になるのです。身體の何處か一部が病むと、身體全體が病みます。私達お互の關係も亦これと同じことです。病める一部に對しては、他の全體が扶けねばならぬのがありのまゝのことです。もし忙しくて手の足らぬ家があらば、托鉢の身を寄せて、何なりとお役に立つまゝに立たせていたゞくのです。あらゆる差別を超へた平等です。自他一体の世界、生活です働らきによつて產み出され、自分の養はれた剩りの物を、皆我が所有となす處に自他一体の世界が壞れ、生活が消えます。慾の世界の人となるのです。

ありのまゝではない生活へ、ありのまゝを持つて行くのを托鉢と申します。よく人は私共の生活を奉仕だと申されます。人からどう言はれやうとそれは別問題です、自分がさう思ひ上ると危い。手傳つても、手傳つたとも思はぬ、『いゝことをして下さつて』と言はれても、そんなことをしたかしらと思ふほどの無想三昧です。働らき切つて、掌を合せて拜んで歸る。ありのまゝです。世の中の働らきにはいろ〳〵あります。働らかないで奪ふ生活と言つたやうなものも、決して尠くはないと思ひます。强盜といふのはそれらの最も露骨化されたものです。なるべく働らくことを少くして、結果を多くと望むのです。現代の資本主義生活は之れの樣であります。出來るだけ働らいて、結果を自分のものと思はず、預る氣持で貯へておき、正しく求められた時には惜しみなく出

すといふやうなのは結構ですが、兄が學士になり、世間へ貢献するためにとて、妹に學校をよさせたり、また苦勞をかける、さうして、聽て自分は學校を終へて大厦高樓に得意然と住むで、誇るのは怖ろしいことです。何の是の如きが羨ましいくらしであらう。

働らいて價格にのせぬ、これを一燈園生活といふものです。本來から言ふと、ありのまゝ働らいて、それで死ぬのが家風です。維摩居士を導師とし、三世十方の諸佛諸神を禮拜しつゝ、ありのまゝなるお光のくらしをして此の世をお光化するのであります。一人々々のからだに現はれる相が、大勢集まつて家風となつて來るのです。お光を信じ、体得して働らくのです。

家風の中で一番大切なものは、托鉢であります。此の一相の中に一切相が含まれてゐます。托鉢は狹義に申せば、他家へ御用を賴まれて行くことですが、廣く言へば、行住坐臥の一切はそのまゝ托鉢であります。

托鉢の一相を開けば先づ次の六になります。

一、不受報酬　一、禮拜　一、下座

一、慰撫　一、便事　一、懺悔

報酬を受けないことゝ、拜み合ふことは、普通の生活にはないのです。これは最も强いことです合掌すると別の世界が出ます。食事の一つにしても、いたゞく時合掌すると、仕事は仕事で、食事

はお光に養はれて居るのだといふことがはつきりして來ます。托鉢された方では、お光に食事を供養したことになります、心と身とで拜む、他も我も淨められた尊い心境が開けます。呼ばれては先づ門前から拜んで入り、お勝手で下駄を揃へる、着物は質素に、そして虔ましく下座をとる、これが家風であります。

ある場合、第三者を害するやうなことを賴まれることがあります。そこでしない方がよいと思ふこともあります。併し、世間ではそこまですることを望み、喜びます。遊興のお伴をする、そこまではせいでもよい。外に病人があつて困つて居るところもある。とにかく第三者を害することはせぬやうに、上にあがれば合掌する、下にゐれば下駄を揃える、主人や奥さんが、女中さんや小僧さんの下駄を揃えるやうになる處まで行けば、理想的です。それ程の慈しみも湧く筈です。この祈りが六萬行願になるのです。

托鉢はお光の種も持つて行くのです。托鉢の緣に觸れて、全体の救濟が行はれるのです。こゝまで延びて行かねばならぬ内容はあるのです。お光の中へ飛び込まぬ故に物足りなくなるのです。托鉢されたお家では、たゞ勞働者とは思はず、出來るだけ問題のために叩けばよい、叩けば叩くほど鳴る内容は具つてあるのです。

受けぬ生活ですといふと、ではどうして一燈園は立つかと言はれます。他から見たら無理のないお

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

訊ねです。要らないのですといふのは容易なことではない。要らない内容を判然持つて居らぬと云へぬことです。觀音經にどうぞ慈悲で受けて下さいといふ意味のことがあります。曾て、私がある席貸しへ托鉢しました時、大分髭が伸びてゐました。そこのお家では『天香さん、あんたのやう言ふたかて、やつぱりお金はいりませうがな、』と言ふ風だつたのです。私の髭を見て『髭が伸びましたな、剃つたらどうです、』といひます。『剃りたくもありません』と私は言ひました。そのお家は商賣の体裁上、髭が伸びたり、見苦しいのは困るのです、仕事はして欲しい、顏を余り汚なくしてゐられては困る、仕舞に『剃つて下さい、どりぞ剃つて下さい』と言はれ、『なるほど、お金はいりませんなあ』と言はれたことがあります。剃つて下さいとなるまで、口にしたり、促したりせぬやう肯て受けぬことを腹の中にしつかりと持つて居らねばなりません。また、受ける時には、ちつと靜に合掌してゐると、先方の心が淨まります。貰はぬ、戴かぬと、傲慢であつてはならぬ。他家の門口に立つことさへ、すでにその家の軒を犯してゐるのです。それも至心もつて祈り拜むことによつて、自他共に淨められます。

法然上人のお弟子が勸進帳を持つて歩いた時、道で乞食に逢ひ、乞食のお金を無理に上げさせたといふ話がありますが、まことに意味深いことです、引きたくつても德を積ませる私心なき慈悲三昧です。よく女中さん達で、托鉢者に食事を下さる時、いやな顏をすることがあります、それでも

此方は合掌すればその女中さんは救はれます。順逆共にこちらが私心なく、我執なくして禮拜すれば、そこにお光の淨土は輝き出ます。

或は、どんなに罵倒されても、この人も佛になる、誠に當來の佛と合掌するのです。瓦を投げられても、玉と思ふて袖で受けよと、不輕菩薩は三昧の言葉を敎へられました。當來の佛を拜む、これが一燈園生活であります。合掌の味は、到底智識の及ばねところ、世界が違ひます。家庭の中で裁き合ふ代りに、拜み合ふことにすれば、同じ仕事も生き〳〵して來ます。

一燈園は經濟的生活から遠ざかり過ぎてゐる、世間的仕事の實際の役に立たぬといふことをよく言はれます。一燈園生活者としては、なさねばならぬ場合はなしうるだけの力量を常に育てゝおかねばなりません。外へ現はさず、內容として持つてゐるのです。

かくして、一人〳〵に現はれる行持淸規が寄り合ふて、集團の家風を成すのであります。(未完)

◆本號表紙題字　は吉田陰松自書「士規七則」中の「士行以質實不欺爲要以巧詐文過爲恥光明正大皆由是出」よりいたゞきました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

礎をおく人

住田蓮車

封建主義、資本主義、社會主義、共産主義、無政府主義——社會はあらゆるものを通じて進んで行きます。説くところ、是とするところにはそれ〴〵の違ひもあるであらうが、共に欣求し渇仰しつゝ目がけて居るところのものは、全く同一であると言つて差支へないでありませう。

　それは、誰もが決して爭ひをせず、怨み合ひをせずに行ける生活を立てることです。誰もが餓えず、凍えず、一人が樂しみうる幸福快樂は萬人が共に之れを享受しうる世の中を將ち來たすことです。

　鬪爭の生活を憎みながら、もし私達自身が鬪爭の生活をして居るならば、それは間違ひではないでせうか、搾取なき社會の實現を高唱しながら、もし私達自身の生活が搾取によつて立つて居るならば、災の根は決して絶たれぬでありませう。

　他のことは兎も角、自分自身の身と心と生活を、驕らず、虔ましく、和平なものにするといふことは如何にも小さく、混亂紛糾してゐる此の時代に力ないことのやうであるかも知れませんが、まことは此處にこそ生命を淨め、一切の生活を建て直す泉は藏されて居ります。

　少數者が多數の者を我意のまゝにする英雄の時代は過ぎた、一人の王者が權勢を恣にする金殿玉樓はいりません。誰でもが入れ、誰でもが憩ふことの出來る虔しい家が必要なのです。光の家です、光によつて護られ、光によつて養はれる家です。光の家が地上に一軒でも多く現れることは全体の悦びです。

　悲しみの棲み家とならず、災のもとゝならず皆が悦べる家で地上が滿たされたらどんなに輝やかしいものであらう。いま、私達一燈園生活者は、その小さい捨て石の一つ一つの礎を置く人でありたいものです。そこにこそ、革命以上の革命、最早再び革命を要さぬ革命は成就されるでありませう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

十輪堂の松風を聽きて

安藤州一

詩會がすんで家に歸つたのは早や夜の八時頃であつた、一燈園の事が色々と心に浮んで來た今日青年と語つた事などを回想した。自分が托鉢の形式は今までの通りでよいが、托鉢をする人の氣分に修錬がいると云ふたのは、次のやうな意味である。どんな家に托鉢しても、自分が去りたい時に去り、留まりたい時に留まると言ふやうな、自由になるのが大切である。其家の人が托鉢者を理解せず、其仕事が自分の身體に不相應であるならば、無理に留まる理由はないと思ふ。また其家の病人が危篤で、自分が去るならば、其後の困ることが分りきつて居るならば、たとへ園から歸れと言ふても、それを拒絕するだけの强者となりたい。實際一燈園の修行は、いかなる人物になるのが本旨であるかの問題が起り得るが、强者になる事は、主要なる眼目でなければならぬと思ふ。しかし强者になるには、知慧の眼が開けねばならぬ。科學の知慧ではないが、德性上の知慧である。世間では此知慧を開く爲に、讀書もする、思惟もする、道も聞く、經驗も積む。然るに一燈園では、實行方面から此知慧を開かんと努める、其所に一燈園の特色がある。我慢を取り去るのも善い、執着を離れるのも善い。しかし我慢を去り執着を離れんとするならば、理論を聞くよりも、先づ實行せよ。我慢を去るの理論よりも、家に入つて先づ下足を正しく揃へよ。執着を離れる理論よりも與へられた物に滿足するの心を養へ、そこに自然に我慢も去られ執着も薄らいで來る。かくの如きことが、一燈園の規則の上になくても、實際の托鉢の目的は其處になくてはならぬ小執着と小我慢と離れ、大執着大我慢の光りが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

顯はれて來るならば、解肢脱の妙境は近づいて來るであらふ。人世が苦しい、人世が惱ましい、それであるから一燈園に入るとしても、園に入つて托鉢をしても、やはり苦しみと惱みはついて來る、所詮人間の生活から苦惱をとりさる事は出來ぬ。されどその苦惱の中に、尊い意味を見出した時が、煩惱か轉じて菩提となる時である。煩惱卽菩提といふ事は、煩惱が無くなるのでなくて、惱みの中に光りが生ずる事であらふ今まで人生で無意義に惱んで居た人が、托鉢生活に入て、合掌して食卓に就くのは、一抔の水一椀の食の中にも、尊い光りを見出さんとの修行である。水の光り食物光りと言へば、光りは品物の上にあるやうであるが、實は自分の心の光りである、水にもパンにも感謝の頭を下げ得るほどに心の光りが湧たのである。

自分がさきに、知慧といふたのは此光りの事である。科學や理學の知慧ではない、この先りの出る事は容易ならぬ大事業である。この光りが出て來れば、最早や一燈園を去つても善いがこの光りは絶へず見えたり隱れたりする。それを見失はぬやうに、合掌感謝の生活を續けるのが園の托鉢生活であらふ。去るにも光りを見出し、留まるにも光りを見出したならば、それこそ自由の人となつた强者である。故に托鉢の形式を改むるよりも、托鉢の氣分に注意して、漸次に强者の資質を養ふて、去ると留まるとが自由になるやうに心を注いで行けば、自然に執着も薄らぐ事と思ふ。されど善意に於ける執着は何處までもなくてはならぬ。この病人が杖が上るまで働きたい、この仕事が出來るまで托鉢したい。此種の執着は、執着には相違なきも、すでに光りに惠まれた執着である。光りに惠まれて來れば、去るも留まるも共に光りである。これこそ柔順なる强者である。自分の詩に、『强剛を磨し去つて能く柔と作す』とあるのは、弱者の柔で無くて强者の柔である。西田さんは意志の人、實行の人であると共に、また一面に剛者である。いかにすれば、この剛を變じて柔となし得るか、そこが苦心のある處であらふ。今ま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

では實際的托鉢の上で、柔の心を養成したいと勸めた。されどまだ充分でないと見へて、いま現に十輪堂に坐禪をして、板椽の上に起臥して居られる。人は剛の本質の上に、柔の心を養成したのは結構であるが、本來柔たる者が、其上に柔の心を養ふたならば、人間の美點を失ふであらふ。故に剛性の人が托鉢に由て柔を養ふは善いが、柔性の人は、却つて托鉢に由て剛性を養ふが善い。これが私の言ふ、去るも留まるも自分の好な所に従ふやうに、勇猛の心を養ふことが大切で、托鉢の形式よりも、その氣分の上に心を注ぐが大切であると言ふ所以である。人間には知情意の三方面があるが、意志は人間精神の根本らしい、眞實の實行は意志から起る、この意志をいかにして養成するか、これが學者の苦心の存する所である。孔子は論語二十篇の中に仁を說いたが、いかにして仁を行ふべきやとの問に對して、『己れに克て禮に復れ』と言はれた。克己は意志の練習である。子思は、『人これを一たびすれば己れこれを十たびす』人これを百たびすれば己れこれを千たびす、此道によれば、愚なりと雖も必ず明らかに、柔なりと雖も必ず强し』と言はれた。やはり意志を鍊習する事である。獨逸のフィヒテ氏は、近代の大哲學者であるが、人間の根本精神を意志と認めて、その意志の上に理想主義の哲學を建てた。フロシャがナポレオンの侵入を受けて、國家衰退の極に達した時、フィヒテ氏は『獨逸國民に告ぐ』の一文を草し、國民の意志の光りは照された自發的勃興を捉がした。かくて七十年戰に於て終に佛國をして城下の盟をなさしめた意志の强固は精神の統一を待たねばならぬ、精神の統一には知慧の眼が必要である。托鉢の實行より知慧の眼を開かんとするのは、一燈園の生活であるらしく思はれる。昨日十輪堂を訪ふて、西田さんには遇はなかつたが、庭上の松風の音を聞き、色々の思想が浮んだ、これを此まゝ忘れて仕まふのは殘念である、故に其大略を記して置く事とした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

歐米資本主義發達史要（三）

久保田明光

第五講　ドイツに於ける資本主義の發達

經濟上の發達が各國とも正しく同じ道程を辿るものであるとは言ひ難い。蓋し各國とも各々特異の地理的（そして或場合には民族的）な諸條件を有つてゐるからである。然し精神上の文明の相互交換が大いに行はれ、更に又各國の各種の産業が相互に協同交易さるゝに至つて、即ち年代的に言はゞ約一八七〇年代から、百年前に比すればずつと同時代的に發達をする樣になつて來た。

さてドイツは一八〇〇年には未だ中世の封建制度の桎梏の下にあつた。然るにイギリスに於ては封建制度は三〇〇年も前に廢止されてゐた。當時のドイツの總人口の八割が農民であつた事によつても之がよく了る。而もその耕作方法は實に原始的なものであつた。然し十七世紀の以來小さな交易や手工的工業生産の上に築かれてゐた封建的な都會生活は漸次衰へ來つた。プロシャの首相シユタインの實施した政治上の改革は兎に角封建制度廢止の第一段梯であつた。法律を以つて土地に結びつけられ、領主の土地で强制勞働を余儀なくさせられてゐた隷農（サーフダム）制はプロシャに於ては一八〇七年に廢止された。然し事實封建制度の殘滓が全く一掃されたのは一八六〇年後の事であつた。この隷農の廢止後農村生活に現はれた現象は、既にイギリスの所で述べたと同じ樣に『構圍（エンクロジユアー）』と最隷農民の驅逐といふことであつた。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ドイツの他の諸國、それは一時ナポレオン大帝の掌握下にあつて、その革命的諸改革を施された諸國——殊にラインの諸國では既に隷農は廢止されて居、國內關稅は廢止され、道路の構築が既に始まつてゐた。

然し概して言ふならば、ドイツの產業革命は一八五〇年迄には起らなかつたと言へるであらう。即ち一八四六年には全プロシヤに僅か一三六の紡績工場しかなく、シレシアに於ける三〇〇の熔鑛爐中僅か九つだけが骸炭使用爐であつたに過ぎなかつた。然るに一八四五年と一八六〇年の間に於ける原綿使用量は三倍以上となり、一八五二年と一八六七年との間に於ける紡績數は十二割二分の增加を示したのである。

ドイツに於ける產業革命がかくの如くに遲れて來たといふ事の原因は大体次の四つに盡きるであらう。先づ第一は封建制と隷農制の廢止がおそかつたといふ事であり、第二は資本の集積がイギリスの如くに速かではなかづたといふ事である。蓋しドイツの商人階級はイギリスの商人階級の樣な殖民地貿易で富裕になる機會を持つて居らなかつたからである。第三はイギリスやフランスやオランダにあつた樣な進步した銀行制度がなかつたといふ事であり。第四にはドイツ特異の事情であつた所の數邦分立の形勢を擧げる事が出來る。ドイツ帝國を形成してゐた數邦は各々法律と、關稅と貿易上の制限を持つてゐたので交通も限られ市場も勢ひ狹隘であつたのである。

然るに一八三三年にはプロシヤが關稅同盟 Zollverein をつくつて貿易上の諸制限を徹廢し、一八五〇年には鐵道建設が始まり。更に一八六七年にはドイツ統一の第一階段となつた所のビスマアクの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

北ドイツ聯盟が、國内自由貿易の擴張と鐵道制度の統一に成功した。かくてドイツ産業革命の直接原因となつたものは、イギリスの機械や熟練職工がシレシアやサクソンに入り込んだ事であつた。續いてこの第一次産業革命の後に第二次産業革命が來た。その機會は一八七一年にドイツがフランスから石炭と鐵の産地たるアルサス、ロオレンを奪取した事にあつた。かくてその地方の鐵鑛は、前講で述べたトーマス、ギルクリストの發明によつて充分利用される事になつたのである。かくて現在のドイツの經濟的諸特長を列記すれば大体次の四項に盡きるであらう。

(一) 一八九〇年以後の電氣事業の急激な發達、例之既に亡きラアテナウが統轄してゐた一般電氣會社(A・E・G)の如きが有名なものである。

(二) 田舍地主たるユンカーと工業家との政治的妥協、イギリスの樣に海外より食料供給をする事が出來ないので一朝事ある場合には國内農産物によつて支へなければならないので、勢ひこうした妥協も必要になつて來たのである。然し一九一八年の革命は畢竟するに工業家によるユンカーの勢力の一掃に外ならなかつた。

(三) ウエストファリアの、製鐵及石炭等に於けるカルテルやシンディケートの發達。一八九三年に出來たエッセンのライニッシュ、ウエストファリアン石炭シンディケートは其地方の全石炭等を統轄してゐる。又一九〇四年に出來たデュッセルドルフの製鋼同盟は主たる製鋼業を網羅し、スチンネス製鐵製鋼合同は戰後著しい發達を示してゐる。

(四) 特殊な商業銀行の發達。例之ドレスドナー銀行やドイツ銀行等。之等特殊商業銀行の發達は

ドイツに於ける私人の手に資本集積の稀少である事を語る一證左でもある。

第六講　フランスに於ける資本主義の發達

フランスではドイツと異り、大概の封建的諸制度は一八〇〇年迄に既に廢止され、商人階級發生して殖民地貿易を通じて充分富裕になつてゐた。かの有名な一七八九年のフランス革命の社會經濟的結果とも言ふべきものを總括してみると次の六項に盡きるであらう、

(一) 封建諸制度及地主の權力一掃したること
(二) 中産ブルジヤァ階級に政治的權力を賦與したること
(三) 或程度の租税負擔を直接税の形式を以つて地主に轉嫁負擔せしめたること。
(四) 大所有地の崩壞。
(五) 自由商業及び勞働の可動性を阻害してゐたギルドを全廢したること
(六) 國内關税の全廢。

新思想の權化とも言はれたナポレオンは、或は道路、或は運河、或は港灣と言つた各種の公共的な仕事を始めた。而して之等すべては資本主義社會の發展の不可欠の要件であつたのである。

他方に於いて、一八〇四年のジヤッカー絹布織機の樣な纎維工業界に於けるフランス獨特の發明が現はれたが、一八二五年迄は專ら手工業が全盛であつた。然るに一八二五年、即ちイギリスがその機械輸出の禁を解いた年以來、イギリスの機械輸入が漸次フランスの纎維工業界を革命して行つた。かくて一八三四年には未だ五千動力使用織機しかなかつたが、一八四六年迄には三萬一千に增

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

加した。又一八三〇年には骸炭使用の熔鑛爐が製鐵業に用ゐられてゐなかつたが、一八六四年迄にはその數が木炭爐の數を凌駕した。國家の管理下に於ける鐵道建設は一八四二年後急激に進んで行つた。更に一八五二年後、ナポレオン三世によつて諸國と結ばれた商業協約（主として自由貿易に關するもの）は又大いに資本主義的發展を助長した。フランスに於ける製鐵製鋼の第二次産業革命は他の諸國と同様一八七〇年以後に於いて行はれ、一八七〇年と九七年間に於ける工業生産品は三倍の増加を示した程である。然し、ドイツや北米合衆國やイギリス等で起つた近代的大規模工業への變轉は、フランスに於いてはごく微々たる前進を爲したのみであつた。

例によつて、最後にフランスの經濟組織の特長を列記すると次の様な有様である。

（一）石炭と鐵の大規模な供給を欠き、現在の供給の處々方々に散在してゐるので、一地方の工業の集中を妨げ、他國にあるが如き工業の地方化を見る事が出來ない。

（二）從つてフランスの工業は量的に優れるよりも質的に且つ技巧の點に於て優れだ製品を出す事に秀いでゝゐる。

（三）フランスは依然としてすぐれた小農々業國である。

（四）銀行業の優れた發達を見る。之等の銀行は節倹な農民から預入れられる零細な資金を蒐めて外國の大事業に投資してゐる。

—（未完）—

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

吉田暎二第一戲曲集

疲れた家

定價貳圓五拾錢
紙數三百三十頁
裝幀美本箱入

内容

疲れた家　兎と龜
道化　父

此處に納めた四篇は皆自分の習作に外ならないけれども、自分にとつてはどうにもならない問題のみを取扱つたものだ。『道化』では、「藝」と「家」、『父』では「家」と「道」との間の關係を取扱つた。「藝」に入るには、又「道」を修めるには、はたして「家」から出、家を捨てなくてはならないだらうか。それが正しいだらうか。自分にとつては可也大きな問題である。又「疲れた家」では現在の日本の中産階級のだらけきつた姿、無爲と困憊の内にしぼんで行くすがたを、比較的客觀的な立場から見つめさせて貰つた。いづれも藝術としては未熟ではあるだらうけれども、自分として取る態度と立場は今後と雖もこの小さな戲曲集より外へ出る事はないであらう。（著者）

發行所　東京市小石川區第六天町二四　段丘社　振替東京六四六七九番

發賣所　東京市日本橋區元柳町十　青々堂書店　振替東京四一八八三番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN